

志

正月号



アケマシテ

オメデタウゴザイマス

今年モ仲ヨク イッショウケンメイニベンキヤウ
イタシマセウ。

今日本ハ非常時(タイセウナトキ)トイハレルホド、國ノ

外デモ内デモ ムツカシイコトガラノオホイトキ

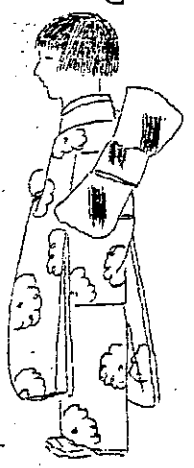
デス。 ミンナ、何ゴトデモ シツカリヤリマセウ。

ソシテリッパナ日本人トナリ、モットモットスグレタ

ツヨイ國ニイタシマセウ。

才正月

尋一



大関 益子

私ハ才正月ニアサ早くオキテハ

ツ日ヲオガミマシタ。 ソシテタミ

チヤントセツ子サントタイサウヲ

シマシタ。 ソレカラウチヘカヘツ

テオゾウニヲタバテガツカウヘイ

キマシタ。 ガツカウノモシノ所ニ

ヒノマルノハタガ風ニフカレテヒ

ラヒラシテオマシタ。 カドマツモ

エツテオマシタ。

ミンナギレイナフクラギテウ

シサウニアソンデオマシタ。

ネガヤンヤントナリマシタ。

私ハイソイデナラビマシタ。

ウシテシキジャウニハイリマシ

タ。 シキヲシテカヘリマシタ

モウランナノ子がオタイコヲ

シメテアソンデオマシタ。 私

オタイコヲシメテモラツテオ

ンシニイキマシタ。 ヒロ子サ

ノウチデハコマトサイフトカ

フウセンヲモラヒマシタ。 レ

子サンノウチヘイツタラキヤウメ
 シンヲ一サツトエンピツヲ一ホシモ
 ラヒマシタ。ソレカラミンオト
 ハネツキヲシテアソビマシタ。ソ
 ノアシタモ、マタオタイコヲシメテ
 ハネツキヲシテアソビマシタ。
 ボクハケイブホサンノウチニイ
 ギマシタラオトウサントオカアサ
 ンガ来テキマシタ。ボクモハイ
 ツテスゴクヲシマシタ。一バン早
 カンヲニツモラヒマシタ。ニ
 イメニモ一トウニナリマシタ。
 ソレデウレシガツタラオバサ
 ガチクオンキヲカケテクレマ
 タ。ヘイタイノヲカケタリソ
 キヤウダイノヲカケタリシマ
 タ。ソレデ大ソウウレシカ
 ノデ。
 「モウ一ツカケテ」
 トイヒマシタラ、マタカケテクレ
 マシタ。

羽 齋 夫

シセウ、ハ
 ヌイ子

2 学年

△お正月

キクチスエ

私たちのたのしいお正月もやって
 来ました。元日の朝はかどまつの
 そばを歩く人もどんなにの氣もち
 がいいでせう。空は日本ばれの朝
 でした。みんなきれいな着物をき
 て、おたいこをしめて、ほがらかな
 きもちで先生のお家へ「新年おめ
 であうございませ」と大ぜいであそ
 びに行きました。やよひさん、えみ

ちゃんの子は西まちです。
 先生のおうちで元日一日をすませ
 ました。
 △かゞみ

沖山フサ子

この間、私がかゞみをみて、
 のかほがうつりました。だから、
 こがおかあさんにているか、ど
 がおとうさんににてゐるかよくみ
 ましたけれど、わかりませんでした。
 私が笑へば笑ひ、また私がおこれば
 おこる。私のかほは、こんなに赤い
 かと思つたら、急にはづかしくな

ので、もう二度とかいみなんのみ
ないとおもひました。

△お父さん

私のお父さんは、丸がほで、あたまは
横分けです。お父さんはいつもおお
やくしよに通てぬます。おやくしよ

からかへる時、小さいたかゆきさん

やゆきをちゃんをみると、ふざけてこ

れはだれた。といって、だつこをします。私

はふざけてぬることは知りません

から、やだ。おとうさんがあんなこ

といて、といて私が笑ふと、ふざけて

とおかあさんのこ息

沼田順子

ぬるのだよとおとうさんがおしや
います。たかゆきさんたちはよ

ます。お父さんは小さい子が大き

きです。

△雨ふり

雨ふり

雨ふりに、私が外へ出てみたら、

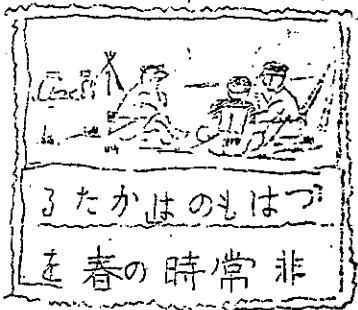
ばらのお花が、びしよぬれ。

私の下たもびしよぬれ。

お池のきんぎよはうれしきう、

雨ふりに外へ出るとかぜひくよ

とおかあさんのこ息



方 綴 の 三 尋

紙くづ

浅沼榮一

私、くづがごにほうり込まれた紙のくづです。元々
れいな、ひらたをして紙屋に居た時、あつて学校の生
徒に買はれた。その生徒は大そう行儀のよい
字の上手な人で、学校でも何時も甲上ばかりで、よくは
り出されました。そんな時は私まで鼻が高く、うれし
くつて々々たまりませんでした。其後月日がたつて私は紙すき場で、又新
らしく生れかはつて来ました。次に私を買つた人は行儀の悪いなまけもの
の生徒で、家へかへつても書方のおけいこなど少しもせません。いつも
丙ばかり取つてみました。家へ持つてかへつてお父さまやお母さまに見せ
せないで、すぐくちや／＼にして、学校のくづかごにほうりこんでしまいまし
た。それで私は今こんな所におるのです。私はかたしく、毎日泣いてみます。
早く又うつくしい紙に生れかはつて、始のような、字の上手な行儀のよい生
徒に買はれるのをまつてゐます。をはり

◎皆さん此の氣の毒な紙くづに同情しませう、そして紙をソマツにしないようにしませう
そうすれば自然お行儀もよくなる。書方もスグ上手になります。

兵隊の兄さんへご返事

西濱芳江

兄さん、先日はお手紙ありがとうございました。おじやうぶで何よりです。もう兄さんも軍隊になれて、日曜に外出ができた村のお友だちとおつたそいでおね。おいぶんゆくわいでしたろう。それに兵隊さんはおまるにもごはんだべつにもおんじうにでもだもまたねるときもみんなラツパでやるので元氣で勇ましいです。兄さん、しつかりやつて下さい。私も一せうけんめいべんきやうしておます。家はお父さまお母さまみんなじようぶでくらしてみます。さようなら

三十三の級長副級長から



昭和十年ノ始ニ

一、先生のおしへをよく守つて勉強しませう

横山秀雄

二、ぎやうぎを正しくいたしませう

石津嵩夫

三、ことばづかひをていねいにしませう

重田彌生

四、せいけつせいとんにきをつけませう

木乃岡正江

尋四綴方

〔朝〕

鶴沢寛

或る朝僕は特別早く起きた事があった。その時はまだ空にはお星様がきらきら光つてゐた。母は台所で御飯をたいてゐた。父もヨシはまだ寝てゐる。ウミは一生懸命で書方を書いてゐた。僕は起きて一人で前のえん盆にいつて寝ながらいろ／＼の事を考へてゐた。家の前の通りにはたゞ一つ福美屋の外燈がうす暗くついてゐる。所々で戸を明けける音がきこえる。とほりは盛にコケツコツコとないてゐる。そのうちだん／＼明るくなつて来たので井戸端に顔を洗ひに行つた。顔を洗ひた。そのうち一面に明るさがさして来て

通りは皆家の戸があいた。いろ／＼と透んで御飯をたべ学校に行つた。

野口 晃

ガラスまどがだん／＼白んできて夜はだん／＼あけてくる。所々には鶏の聲もきこえるし、近所ではがら／＼と戸をあける音がする。電信所では兵隊さんがあせいのよい大きな聲でござい水をかけて体さうをやってゐる。このごろは寒くなつたので僕はかほを洗ふ時には寒さをつめたきにかこま水でふるへながら洗ふ時もある。僕は口ぶえをふきながら学校へいそいだ。

富士井悦子

ふと目をあけるとうぐいすの鳴くこ

高がした。私はとび起きた。今日も青空でよいお天気だ。かほをあらうてゐると濱まりの葉が風にさわさわとなる。木々も朝日に照らされてきら／＼光る。ぶつさうげの花は赤くて大にう美しい。司令部の天井よ鳩が何十と數へき水ない程むれになつてさつととんで行く。私は應接間に入らうて勇ましい朝のマーチを聞いた。

◎ 内海幸子

此の頃の朝はとても寒い。今朝うとくしてゐたがとび起きて時計を見ると五時十分前であつた。まだだれも起きてゐなかつた。私が着物のをきかへてゐる時おねえさんが起きてきた。昨夜私がおねえさんに「どうしても早く起きよう、見よう」といふ約束があつた。

のでうれしかつた。そのうち外にでて庭をはき初めた。あまり風があるのか風のかみむか小へゆけこんだふいたりぶつよ」といつてひとりごとをいひました。水をてごはんをたべ学校へ来た。

◎ 浅沼花

私はけさおきてどけいを見たら五時半だつた。あたりをみますとみんなよくねてゐた。私はえんがほの戸をしづか／＼あけてるとへてた。にははしんとしてゐた。とりの方をあはしてつと見るとおはあさんがなにかしてゐた。私はそれから兄さんをおこしにいひつた。兄さんはまだねてゐた。私は「兄さん」とこゑをかけた。すると兄さんはねぼけて「なんだい」といつた。私は兄さんとともにかほをあらうごはん

尋五綴方 おめでたう

◎ 私はずいぶんです 金川幸雄

私は隣人主人にけづられさす。私はいたい。いたいいつてなまます。するも本意やナイフ意が出て来いいつかかたきをうけてやる。おとさすやくれますから安心です。ある時本意とナイフ意が絶たうたんしていきまし。たり主人がナイフ意とえんびつ居をいつてけづらうとしたりナイフ意がうごいたので主人の手がきれましたのでかたきがとれました。うごけしごむ意をきつてごちさうをました。

◎ 僕はお鍋です 平野重直

僕は鍋です。僕がこかやうに成長したままで身の上話をいたします。石炭さんや酸素さんとの山の中に居た時私を他人が来てかついで行って踏破屋の中に入れてました。コークスさんと石炭さんも来てました。うら人が来て

下から火をもしたうであつてなまりません。コークスさんの中の酸素さんは酸素さんとおぼしといつてどこかへ行つてしまひました。おんだん火を少ししかもなくなつたしてみえであつくなりました。酸素さんは煙の上に乗つてゐました。酸素さんは横に流されました。私はまたもにたてられてどろ／＼としてゐるうちに酸素さんが天にのぼつて行つてしまひました。それから僕はカタに流してしまひました。

◎ 鏡はうつつた私の顔 藤原栄子

鏡にうつつた私うれしさうにわらうてゐた。ニッコンとわらうてゐた。私はへんをかほして見た。おのたかに鏡の中の顔もへんをかほをした。おのたをふくらました。鏡の中もふくらました。私は面白くわらうてプーンとふきだしたらかかみひきおひつかけたので鏡がくもつてよくわからなくなつた。これにふいてかほをよくみた。どこかお父さんに似てゐるだらう。お母さんにはどこか似てゐるだらうとよほ／＼よくみたがわからな。ときどきおれを「おぢさん」といつてまじかへる人がゐるがど

こが似てゐるまぢがへるのぢらうと思つて
見てゐるうちにいつの間にかうれしさを
かほが不思議さうな顔にわかつた。

。弟とアブラ虫 石津若子

「アブラ虫」の聲は目がさめたわどこを
かたつけて、お掃除に取りかかつた。ハウキで
ざしきをはいてゐると、押入の中より小さな
アブラ虫が一匹飛び出して来た。弟は、おぼ
やくアブラ虫を見つけて、モノサシをもつて
アブラ虫をおつかひをした。するとアブラ
虫は机の下にかくれた。弟は机の下をガキ
／＼やつてゐたが、まもなくたつと、いもうと
がやつて来た。姉も、おぼやくアブラ虫を
可愛さうに足をもいでしまつた。よとよも可
愛さうのやうに、机に踏つた。あとで行つて
見ると成程足が二本も折れてゐた。そのアブラ
虫をまだ膝ぢやんはぶつたりつづいて、おぼ
やくがめてゐた。其のうちに膝ぢやんは、おぼ
やくらしく、モノサシをざしきの裏中にはうり
だして、おぼやくやんの方へ行つた。アブラ虫も机

の下をくぐつて、両方の横にかくれてゐたが、やがて
縁の下へ入つて行つた。可愛さうに、今はあつた
足をひきづつて、おぼやくでゐることであらう。

。僕がりんごの列なり 藤瀬 清

僕は赤いりんごの列なり
かはい子供の通りとき
こんこりこりりと落ちてやる。

僕が赤いりんごの列なり

わんぱく子供が通るとき
頭うつて、へんへ落ちてやる。

僕が赤いりんごの列なり

友と仲よくなる子には
僕もお食へと落ちてやる。

今度は男学生、上半なりが澤山ありました。

おぼやくは、どうおぼやくかね。

おぼやくは、おぼやくかね。

尋六の綴方

昭和十年を迎へて 佐藤平次郎

昭和十年が来た。この年は我が国に取つては重
大である。日本は國際れんめいをめい、又ワ
シントン條約をもめた。それはアメリカが軍
艦五、イギリスも五の割合につくるのに日本
は三の割合にしかつくれた。いふ不公平な
條約には満足できなくなつたからである。こ
の昭和十年は國文がいふ／＼おぼやくなると思
ふ。正月七日に入警兵を大ぜいで送つてはけ
ましたのも非常時だからだ。私達は一心に勉強
し共同一致してこの國難をたかひ国のため
につくさうと思ふ。

元日の朝 小澤克司

夜は明けて来た。目をさまして外に出た時はま
だうす暗かつた。門松が風に吹かれて、さう／＼
と物さびしくなつて居た。お宮におまぬりに行

く人が時々通つて居た。東の空の雲はうす赤くな
つて来た。おぼやくに入つてから、兵隊に行く客二兄
さんと、たこを上げに行つた。ひつきりなしに吹い
て来る風をたこがうけたが、上つて行つた。その
うち太陽があかく／＼と相山より上つて来たので、
私は家にかへつた。他の人のたこは高く上り、うな
りの声がきこえて来る。おまぬりに行く人は一層
多くなつた。太陽はもう空高くなつたので、學校に
来た。

百米 小松壽太郎

あつたの勇ましい光景を、うんたさい。こは運
動場で競技會の真最中です。両方の選手は相た
びひたもうれつに競技をたか／＼かつて居ます。いま
男生の百メートル、今しもピストルは鳴ら
うとして居る。選手はまゆ一つ動かさず、両眼はし
つ／＼前方をにらみ、今にもかけ出さうとして居る。
ピストル、ピストルの音は青空高くひびいた。選手
は一度にどつとかけ出した。両方のおうえんの旗
はひら／＼と、う／＼とわあつ／＼とおうえんの音

が上る。あつ一番先頭は卒業生、二番目も卒業生、三番四番は在校生。決勝日は目の前にせまうたが、在校生はどうしても卒業生をぬけないうと、く／＼決勝突に入つた。と同時にわあ／＼とくわんこの声があふく。おうえんさんよりあがつた。僕たちは残念でなまつては、ざしりをかんだ。

父 板東角男

朝四時頃である。父はもう仕事にとりかゝるのて起きて居た。僕は目がさめたが、昨日の試合でつかれて居るので、又おはいめたが寒くてねむれない。すると父は僕のそばに来て見て、すい／＼とんを押し入れに取りに行つた。父はふとんを僕にさせて又仕事に取かゝつた。あゝ父はあんなに朝早く起きて仕事をして居る間にも、僕の事を考へて、仕事をやめてふとんをきせてくれたのだ。僕は親といふものがどれ程か子をかあいがるかと思ふことがやつと分つた。僕はその時、子は親に孝行をつくすなければいけないと思つた。

私はそんなに似て居るか 黒川澄江
夕方くまちゃんの家に行つて私が男のつぼんをばいで見たら、みんなが男の子にそっくりだ。そっくりなとはやしたのてくまちゃんの家で鏡で見たら、ほんたうに男のやうなつた。私はうちの兄に似て居ると思つて鏡をにらめつこをして居たりくまちゃんのお母さんが私を見て、香ちゃんにそっくりだと言つた。私もそう思ふのにおはさんもそう云ふのだ。私はそんなに兄さんになて居るんだらうか。だがそれもありまへだ。兄妹だもの。

冬の朝 木村サヨ

朝早く起きるとさむいものだから、いつもお母さんに起されてばかり居る。起上つて窓を開けると光があつとさし込んで来る。でもさむい。山でも青々とした木はすくなくない。学校へ行けばなととびあそぶのでさむくないけれど、家へかへれば勉強やあみ物をするすはつて居なくちゃなからさむい。

綴り方



高

西村 正一

英語から歸つて来たのは丁度四時半、きれいに掃き清められた道を通

て歸つて来た。急いで店の前を掃いてから、鶏小屋へ行つて見た。餌をやらうとして、雄鶏が一羽おないのに気がついた。

あちろこちろ、防風林の中をさがしてゐると、やつと南陽館の鶏とけんくを居る所を見つけた。大人が二人見ておた。しばらくする中に、あの鶏が相手の鶏を追つぱらつてしまつた。敗けた方の鶏はこをく

自分の小屋へ歸つて行つた。勝つたうちの鶏は後を見送つて、「コケコ」と高らかに勝どきをあげた。私はうれしくなつて、いつもの二倍も餌をやり、飲水を新らしいのに取らへてやつた。鶏は家へ歸つていからもまだ勝どきをあげてゐた。

戀しいと野先生 杉田次郎

戀しい正月も終つていよいよ第一学期が始つた。然し、始業式以来、何となく物足りない。受持の上野先生が姿を見せぬからだ。

先生には一学期に非常に御迷惑をかかへ、おまつさへ、職員室にまで立たせられた。それい叱られればかりおた。その為にな、何となく、此の恥は雪いで見

とるぞし。

折々として立二つた僕はそれからは
迷惑の掛からないやうに勉強した。
それだけに先生に一寸おはなくて
も非常に悲しい。此の間も算術の時
間に藤川先生が

「二野先生が居なくて淋しいだ
らう。がもう一週間だから其
間がまんして勉強するよ。」

とおつしやつた。其の御言葉聞いて
悲しくなつたが其の悲しみを笑にま
がらした。

昭和九年も明け 奥山留枝

昭和九年も夢のやうに過ぎ、早や十
年となりました。此の十年の元旦朝
日に向つての私の覚悟は九年の歳は
悪い年ぞ人は大勢死に闘つて

暴風雨東北地方では大ききん。九が

つし年は悪いと見えるから此の十年

は目出度過ぎるやうにと拜んだ。

わ、九年！ 私は此の身を恨みた

い。母は遺言一つしないであつた

旅立ちもう二度と歸つて来ない。

今でも何だか母が生きゐるやうな

気がしてたまらない。そして草葉の露

から私を穿つておて下さるやうな気が

する。母が生きゐる時分には、我儘

ばかりして母を苦しめ樂にならな

うちに死なれてしまつた。おん人

作んて果ないものだ。草葉の露と
やうに、どんな人でも一度は死とい

恐しい悪魔が迎へに来ますぐに述

行かれししまか。私は母が死んで

何事をするにも沈んで一つも面白くない。

母は早く赤歸の客となつたのであり

高二の作文

四年頭の感 奥山紀子

昨日までの忙しい気持ちからだもたつた一晩
のうちにさりげなき顔して二五九五年の春を
迎へた、 若水を汲んで口です、ぎ新し
い空気を胸一杯に吸つてこれだけでも気が持
新しくなつた、 朝湯に入つて体を清め新し
い日光に當つた、之で体についていた悪い
のはみんなにげて行つてしまつた、
佛壇に向つて今年の新年を祝し、幸福を祈り
晴着を着て門松をくゞつて校門に入つた、
天気は良く暖で給の着物はなくてもいい、位の
平和な元日であつた、二年の計は元旦にあ
二五九五年も無事に過ぎたものだ。

勝敵は此の一戦 希井三郎

鳴門十一真 菊池初枝

勝つとは危い事から不安な腹し、胸を抱いて砂

勝利であつた、今度の一戦で勝敗を決する種目

である事を思ふとじつとして居られなくて運動

場を飛び出して應援に出た、関谷の前まで来て

待ちながら居へた、若し在隊に一等を取ら

ても二、三回を取れば大丈夫と思つてゐると

金雄が一等と言ひ夢を聞いた、「あ、どうして

も一等を取られるかとつぶやきながら向ふを見

ると金雄は、少しづつくれば、続いて

勝つて居ると、三回等を取るので思はず万才

と叫んで居た、僕は金雄君を應援しながら行

くと後から金雄君がどんく、近づいて来る、
向う金雄が来たのは、はげましたか遂に抜かれて
又金雄君も抜かれてしまつた、決勝まで二人
金雄君を抜いて金雄君を港君が抜いて、三四
の予想以上の勝利となつた、万才万々の聲があ
けて戦は終つた。

から之に依つてその書を御想起下さい
 尚又この三月には展覧會がありますが一層立派な字を書いて父兄の方々
 見ていただく事が出来るやうに皆お互にしつかり努力をしませう

H 生 記

書初展覧會得点表

氏名	特賞	氏名	得票	氏名	得票
尋一 アサロカゲ	七五	尋三 初春の光	六二	奥山登美子	二
一等賞 永田 稜威男	七五	一等賞 重田 弥生	一九	佐々木晴治	二
二等賞 宮川 京子	六	二等賞 横山 秀雄	三	雨宮登美子	二
三等賞 内海 順子	三	三等賞 小林 玉郎	三	佐山 和子	二
選外 渡辺 三朝	二	選外 原田 年光	三	石津 弘子	二
大関 盈	二	山内 初江	三	土屋 せし子	二
森田 千枝子	二	壬生 恒子	三	丹心 答聖明	二
尋二 ハツ日ノ出	七三	太刀岡 正江	三	近藤 卓雄	二
一等賞 平野 昌代	七三	服部 きぬ子	三	高崎 輝子	二
二等賞 藤滝 静子	七三	尋四 春山草木新	二	藤滝 洪子	二
三等賞 横山 芳文	二	一等賞 野口 晃	二	沖山 茂子	二
選外 加賀谷 肇	二	二等賞 高橋 静子	二	菊池 かつ子	二
宮崎 又子	二	三等賞 鶴記 寛	二	宮崎 やす子	二
矢野 恵美子	二	選外 毎田 栄	二	菊池 登子	二
浅沼 清子	二	選外 内海 幸子	二	河野 直枝	二
	二	鈴木 カ子	二	鶴 千賀子	二

練習の時程の成績を得たりしニ君の不運を憐む。

競技はいよいよ前半戦を終り七回目の女子五十米となった、今度も又新レコード七秒五分の三を出す、殊敵者はイーデスワシントン嬢(在)、百米の選手嬢と共に在放組のニ強者、卒業組の嶋みの種であったこの二人が遂に揃って新記録とは全く目出度し。二着は大川富嬢(卒) 笹本曾代子嬢(在)の同着、之を追って新進の田崎珠嬢(卒)の順であった。

ズドンと一発、四百米のスタートは、原田武重君(卒)を先頭に浅沼三男君(在)健口文雄君(在) 横山悟君(卒)と同間隔にマ一列に並び、争ひ事二周、三周に入るやラストの悟君猛烈然物凄きスピードにて前のニ君をゴボ一抜き、遂にトップの武重君に肉迫し間もなく先頭にたつといふ勢。こゝにニ君の競り合ひとなり、ゴールに近づくとつれて武重君又悟君に迫り、僅かに身体だけの差にて遂に悟君の一着。しかもニ君共にレコード一分一四秒五分の二を破り、新レコード一分一三秒五分の二を作つて、遂に大勝利を得たのであつた。

女子の巾跳も又激者にて予測をゆるさぬ飛躍振り、一人例の選手嬢(在)は姉上君と子さんのレコード四米の丸に迫る事後多難といふ大奮闘ぶりであつた、何をやつても人後に落ちぬとは全く未だろしい(在)お嬢さんだ。鬼が笑ふかも知れぬが来年度の戦が思ひやられる、二等が小侯喜恵子嬢(卒)の三米八一、次は三米七四にて六川富嬢(在)金原くま嬢の同着にて、四五秒対六五秒男子巾跳のレコードは目下入道中の小侯喜一君が保持する五米三五、今の所一寸もか否足かと

ガミさうもない、一等の鏡本芳雄君(在)は今度レコードを出すが、有難い成績を出すだらうに四米七三で終つた、次は浅沼介是君(在)は小侯喜から譲り受けの五米原田三雄君(在)の四米四五、沖山鉄雄君は一程の差で四位となつた。八百米リレーに、在放組の女子又々新記録二分三一秒五分の四を出して凱歌をあげたに及して

卒業組はラストに於て小侯喜恵子嬢一周の終りのコーナーにかゝるや突然ころび、起き上れず或は無得失かと思はれしも一同に勸まされ痛む足を引きずり、三度を加へしも悲壮の極みであつた、之に引換へて男生のリレーは断然卒業組リードして張合ひのふい勝負に終つた、時に合計差の差、僅か五米、勝敗は一にマラソンの如何にかゝるといふ事になつた、卒業組は四百米の疲れ未だ回復せぬ悟君に依り、平木龍雄君の新着、文に對して在放組は運動会に二回も優勝した金川美次君と之にもおとらぬ石井金雄君、新進の小宮山基夫君と揃ひも揃つた新着のマラソン常勝者、誰しも甲乙の予想には骨が折れた事であらう、時はたつこと六分一八秒五分の三、四百米の疲れも何のそり、悟君は鏡本と共にテープを切つた、二秒後れて金雄君、引続けて島雄君。之を追ふ甚天君ありしもゴールを目前に望みながら無念や悟君に勝を制せられた、美次君身体の調子悪うかしか後を務む、遂に卒業組は一一点を勝越し、送別の記念に敵も味方もニコニコの笑顔と共にカメラに収められたのであつた、只々在放組の總帥たるべき上野先生の不在なりし事は残念であつた。

◎ 競技会を終へて

嬉しさは胸一杯だつた、勝か負けるかの此

日の競技会も卒業生の勝利として終つた、

ほつと一息ついた、選手の責任は重い卒業組

の思ひほどになつた、選手の責任は重い卒業組



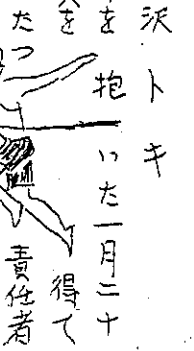
高二、小沢トキ

一戦、苦みを抱いた一月二十

予想外の裏を

を代表してたつ

の事に當



十一日の差、何とうれ

昭和九年度送別競技会成績表

順	種目	得点		今年レコード	氏名	在来レコード	氏名
		得点	実在				
1	100米(男)	3	3	15.5秒	原田武重	15秒	菊池安彦
2	100米(女)	3	8	*16.5秒	小祝温子	16.5秒	小祝温子
3	三段跳(男)	5	6	10.67米	鈴木芳雄	11.02米	ハリスワシロ
4	ボール投(女)	8	3	21.17米	関利エキ	22.82米	持田きかえ
5	砲丸投(男)	8	3	9.42米	神山鉄雄	11.33米	ハリスワシロ
6	走高跳(男)	5.5	5.5	1.32米	豊蔵銀雄	1.48米	短ハリスワシロ
7	50米(女)	3.5	7.5	*7.5秒	ハリスワシロ	8秒	小祝温子
8	400米(男)	5	3	*1分13.5秒	横山温子	1分14.5秒	小祝温子
9	走中跳(女)	4.5	6.5	4.04米	小祝温子	4.09米	小祝温子
10	走中跳(男)	4	7	4.73米	鈴木芳雄	5.35米	小祝温子
11	リレー(女)	3	7	*2分31.5秒	渡子温子	2分33.4秒	渡子温子
12	リレー(男)	7	3	2分22.4秒	渡子温子	2分18.5秒	渡子温子
13	リレー(男)	7	3	6分18.5秒	横山温子	6分11.5秒	鈴木芳雄

◎注意

*.....新レコード

御寄贈

一金五帛也 保護者會基本金へ
 一金五帛也 在りし二費として (以上林久子さんから)

一 東ニ藥中ニ三全児童へ 堤林代より
 一 石灰一袋 競技会用として石坂一次代より

右誌上を以って厚く御礼申し上げます。

學校日誌より

- 一金貳拾五帛七拾五錢也、東北地方への義捐金として職員児童一同より發送。
- 十月十八日、悪疫退散祈願の為大神山神社へ参拝す。
- 一月一日、午前九時より拝賀式挙行す。
- 一月七日、勲章傳達式齋藤良二氏勲八等に参列し終つて入堂兵を見送る。
- 一月十日、正午より書初展覽会ヲ催す。
- 一月二十日、午前九時より送別競技会ヲ行ヒ正午終了ス。